

3. クロストーク

「渋谷駅前エリアマネジメントのこれまでとこれから」

リージョンワークス合同会社代表社員

後藤太一氏

一般社団法人渋谷駅前エリアマネジメント事務局長 寄本健氏

(後藤氏) 前座ですので、私たちからは、今日のお題の「まちの個性と担い手」を皆さんに考えていただくウォームアップを少しさせていただければと思います。まず我々が何者かを、まちとの関わりの中でお話させていただきたいのですが、寄本さんが事務局長なのは知っているのですが、寄本さん個人と渋谷との関わりを少しお話いただけますか。

(寄本氏) この写真は、2013年に東急東横線と副都心線が直通運転を開始する前、地上にあった渋谷駅です。まさに先々週、渋谷ストリームという商業施設が開業しましたが、その前にあったもので、東急電鉄でこの駅をどう見送ろうかというプロジェクトを担当して、はじめて渋谷と深く関わることができたのでとても印象に残っています。

(後藤氏) これは3年前に初めて渋谷駅前エリアマネジメントの事務局と飲み会をした時の写真です。私は福岡の人間で、長く福岡の協議会の事務局長をしていましたが、それが終わった日に渋谷から声をかけられて以来、お手伝いをさせていただいています。生まれ育ちは世田谷区駒沢、遊んでいたのも最後住んでいたのも妻の実家も渋谷で、個人的な縁もあってうれしく思っています。

まちの個性を考える前に基本を押さえておきましょう。エリアマネジメントとは、特定のエリアを単位に、民間が主体となってまちづくりや地域経営を積極的に行おうという取り組みです。私は住んでいない人間として渋谷の個性って何だろうと問題提起させてもらおうと思います。渋谷は今、中心で再開発が進んでいますが、実はそこだけではない豊かな多様なまちだと思います。川沿いの谷の地形に網の目のような路地がたくさんあって、そこで民間がストリートカルチャーを育ててきて出来上がったのが渋谷だと思います。渋谷駅から遠くないところに、いろいろなものが集まっています。ただ同時に、百年に一度の大規模な街の再開発の真っ只中において、画一的でなく特殊な街ではないかと思います。寄本さんに、これまでの渋谷のエリアマネジメントについて、インタビューの形で語っていただこうと思います。まず、なぜこれが始まったのかということからご説明いただけますか。

(寄本氏) お話にあった通り、百年に一度の大規模開発が進んでおり、工事が完了するのが2027年とこれから10年近くかかります。その間もまちに人は来続けるわけで、防

災、歩きやすいまちづくり、情報発信、国際競争力といったものを落とさず、逆に上げていくために、官民が連携してエリアマネジメントをやっていこうという機運が高まりました。

(後藤氏) 都市再生のためには始めるということですね。大きく出ましたね。

(寄本氏) 国際競争力を目指して、住んでいる方も来街者も働いている方も、いろいろな人たちが、どのような思いでもどのような関わりでもよいから世界一だと思っていただけの街にしたい、ここが最初のかつ一番重要なビジョンであります。

(後藤氏) この壮大なビジョンに向かって、固く言えば戦略や計画を立てるのですが、そこでコンセプトが出るということはユニークですね。

(寄本氏) 工事が進んでいく中で公平性や公共性はしっかり担保しなくてはいけないですが、その先を見た時に、やはり「遊び心」が渋谷らしいのではないかというコンセプトメイクから入っているところがポイントになると思います。

(後藤氏) 体制についても少しお話いただけますか。

(寄本氏) 「SHIBUYA +FUN PROJECT」を実現していくためには、まちづくりの方向をきちんとつくって調整していく官民連携した組織と、それを実行していくまちづくり実行部隊が必要だと思います。前者の「渋谷駅前エリアマネジメント協議会」と、後者の「一般社団法人渋谷駅前エリアマネジメント」の両輪で動かす体制にしています。事務局は私が兼務で頑張っています。

(後藤氏) ただ、渋谷は中心だけではなくて多様なので、実はエリアマネジメントという言葉も寄本さんのところだけではないということですよ。

(寄本氏) そうですね。渋谷はこれだけ広い街ですから商店街の方々を含めて様々な団体があり、勉強しながらやっていくことが大事だと思います。

(後藤氏) 実際されているまちづくりの中身をもう少し具体的にご紹介いただけますか。

(寄本氏) まちづくり事業から、事例を説明したいと思います。例えば、年末年始のカウントダウン。国際競争力や渋谷らしさを発信していく象徴的なイベントとして実行委員で協力しています。また、区画整理中の場所を使わせていただき、インフォボックス、情報発信、どこでも繋がる Wi-Fi など、ベースとなるプラットフォームづくりに取り組

んでいます。それから、リバーフェスです。まさに開発するときに街が開いていくという考えで、官、民、そして地元、皆が繋がるようなイベントを実施して、同じTシャツを着て活動する取り組みをしています。

(後藤氏) 場内にも何人か同じTシャツの方がいらっしゃいますね。

(寄本氏) はい。さらに国際情報発信ということで、レゴという世界的に共通な玩具を組み立てて、工事がどのように進んでいくのかを発信しています。ルールづくりに関しては、例えば駐車場について、どこで買い物をしても同じように使える運用ルールを定めることも考えています。他にも、屋外広告物の地域ルールをつくって広告を掲出し、それを財源とした活動をしています。例えば、分かりやすいのが清掃活動です。どこが汚れているから、どのくらいお金を投下すればプラスアルファの清掃ができるのかのルールづくりを検討しています。あとはサインについて、渋谷区と連携して、歩いて楽しいまちづくりということでお客様が迷わないように共通のサインを掲出する取り組みをしております。このサインは、9月に開業した渋谷ストリームにプロトタイプとして大きい地図とともに掲出されていますので、是非ご覧いただければと思います。

(後藤氏) 盛りだくさんの事業ですが、設立されてわずか数年ですか。

(寄本氏) 渋谷駅前エリアマネジメント協議会の設立が2013年です。

(後藤氏) その間にこれだけ全力疾走されてきたというのは、聞いている方もすごいという印象を持たれると思うのですが、悩みもあるに違いないと思います。ここから今日のメインになるのですが、これからどうするのかという話に進みたいと思います。

(寄本氏) 再開発が続く中で、都市再生というプラットフォーム、或いはまちをつくっていくという開発は順調に進んでいます。ただ、これを実際にまわしていく都市経営という視点でエリアマネジメントがどの立場でどういった役割を担っていくのか、その優先順位づけが課題かと思っています。

(後藤氏) 私がお手伝いに入った3年前に、事務局といっしょに考えて理事会に助言をするような実務の仲間が必要ではないかということになり、政策に強い人、デザインとエンジニアリングに強い人、布教活動に強い人、何でもやる人という4人で事務局と一体的に動き始めましたね。

(寄本氏) やはり実務に強い方々にサポートしていただいているので、どうやって動いたらよいのかという考えにつながってきたと思います。それで、渋谷区の皆様のご協力

もあり、都市再生推進法人を獲得することができました。

(後藤氏) これはあつという間に獲得できましたよね。

(寄本氏) 渋谷区をはじめとする担当者が頑張ってくれたおかげで、スピーディにとることができました。

(後藤氏) 今、私たちが課題だと思って議論しているのが、仕組みをどのように持続可能にするかということです。事業で得た収益をもう一度まちに再投資して、また収益を得て投資するという、健全なエリアマネジメントをつくろうと議論しましたね。

(寄本氏) 都市の経営の一翼を担っていくことを考えていかななくてはいけないと思います。

(後藤氏) 言うは易く行うは難しで、まず小さなところから始めてみるということですか。

(寄本氏) どこかで一つ、プロトタイプをつくって、実施して検討していくというPDCAサイクルをまわしていく必要があると思います。東口地下広場という、渋谷駅の地下とまちをつなぐ大事な場所が来年整備される予定なので、こちらをプロトタイプとして、こういった賑わいや仕組みをつくっていけるかを検討し、提案させていただいています。

(後藤氏) フローからストックへ、活動から事業へという転換は大きな話であり、関係者の皆様がここまで尽力されてきたことはすごいと思っています。これからやることはたくさんあって、事務局の皆さんも大変だと思うのですが、こういった方法で人の確保や仲間づくりをされていきますか。

(寄本氏) 全部自分たちでやれば台無しになってしまうものですから、もともとの原点、先ほどの+FUNをつくった時につくった行動シーン、要するに自分たちだけではなくて、まちにたくさん仲間がいるではないか、そういった仲間や担い手の方々とどのように連携をしていくのかということを中心に、エリアマネジメントを考えていくことが今後のヒントや行動指針になると思っています。

(後藤氏) 民衆を率いる自由の女神のようなことですね。変化の真ただ中ではありましたが、お時間もきましたので、最後に一言だけ本日いらっしゃる皆様にメッセージをお送りし、我々の前座を終わろうと思います。

(寄本氏) エリアマネジメントに携わる方々や働く方々にとって、説明が難しいことがあると思うのですが、この仕事が素敵だと思ってもらえることを目指していきたいと
思います。担い手というのは、いろいろなレベルがあると思います。例えば、会場の皆様
にお配りしたプログラムの右下に QR コードがあって、そこにアンケートがあります。
そのアンケートに「こういったことをやったらよいのではないか」と書いていただくこ
とも重要なコミュニケーションです。本日は特製クリアファイルもプレゼントさせてい
ただきますので、是非よろしくお願ひします。会場の皆さん担い手です。

(後藤氏) 事業に転換してきたということは大変大きな局面ですが、この先には本当の
ビジネス・インフラメント・ディストリクト (BID)、産業振興団体に更なる進化の
道がある気がするので、長い目でいっしょに進んでいければと思っています。